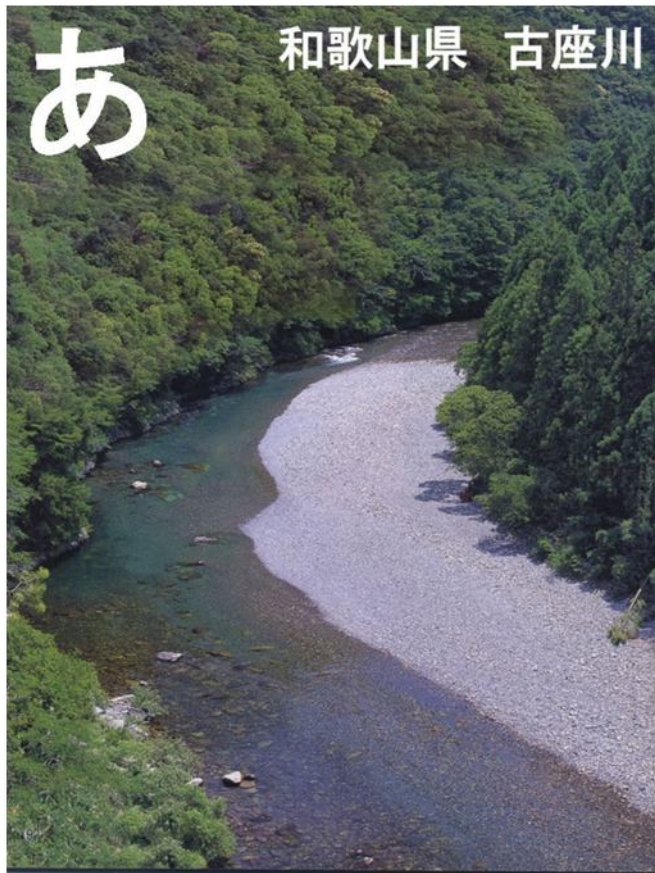


「教科書の川の写真から学ぶ」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

「流れる水のはたらき」の教科書導入ページに、3枚の川の写真が載っている。和歌山県を流れる、古座川(こさがわ)の写真である。この教科書の編集は、実に良い川を選んだものだと、まず感心した。実際に川に行って観察する機会の少ない学校では、こうした資料写真の良し悪しが、非常に重要なのだ。



1枚目の「あ」は、平常時(安定水位時)の写真である。この川は、源流から河口まで、大きな街がなく、森林地帯から集水している。清流(そのまま飲料可能な河川)とまではいかないが、非常に水が澄んでいる。平常時に、川底が見えるほどの透明度がなければ、教科書の導入写真としては役に立たない。

また古座川は、河口(和歌山県串本町)の直前まで、山間部を流れるので、蛇行が激しい。この写真は、多摩川で言えば、明らかに上流部の特徴を見せているが、古座川としては中流部である。典型的な蛇行部の特徴がわかり、平常時にカーブの内側に、三日月型の河原が見え、外側は崖になっている。

私はまず、この写真がどこで撮影されたものかを、調べてみたいと思った。教科書会社に電話すれば一発でわかるのだが、それをせずに、自分なりに探ってみることにした。



上の写真は、古座川の航空写真(グーグルより)である(左が上流)。河口から数kmで、山間部を激しく蛇行している。河原の形状や蛇行のしかたから見て、教科書に載っている写真は、この航空写真付近と推定される。もしこの蛇行の写真だとすると、増水時写真の右岸の伐採跡も説明がつく。撮影位置は、写真中央の小橋の上ということになる。



これは、同じ位置の地形図である。河口からわずか数kmで、急峻な山に囲まれて、すでに上流部の特徴を呈しているとわかる。(つづく)